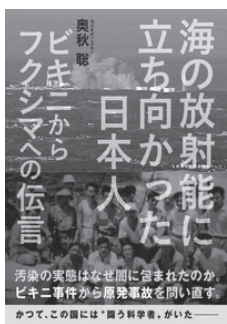




## 海の放射能に立ち向かった日本人 ビキニからフクシマへの伝言

著：奥秋 聡



2024年は、太平洋中西部に浮かぶマーシャル諸島ビキニ環礁で行われた水爆実験により、マグロはえ縄漁船「第五福竜丸」の乗組員23名が被ばくしたビキニ事件（1954年）からちょうど70年です。事件の起きた3月1日には、日本国内のみならず、現地マーシャル諸島の首都マジュロでも追悼式典が開催されたそうです。本書は、

テレビ番組『海の放射能に立ち向かった日本人～ビキニ事件と俊鵲丸』（NHK ETV 特集、2013年9月28日放送）の制作者が、テレビ番組では伝えきれなかった内容も含めて書籍化したものです。ビキニ事件が日本国民に与えた衝撃と、汚染の実地調査に乗り出した科学者の果敢な行動が活写されています。

事件が起きた1954年は、広島・長崎の原爆投下及び終戦から9年後、世界は東西冷戦と核兵器開発競争の渦中にありました。水爆の「ピカドン」を目撃した第五福竜丸の船員らは、証拠隠滅のためにアメリカに沈められることを恐れていたと云います。水爆実験から1か月後の3月31日、アメリカ原子力委員会ストロース委員長は、大量の海水で希釈されるため「数マイル（およそ5キロメートル）以内には無害となるであろうし、500マイル（およそ800キロメートル）以内には完全に検出できなくなるであろう」と、魚や海水の汚染を否定する声明を出します。歴史学者の樋口敏広氏は、アメリカは「海洋とその生物が検出可能な程度に汚染される可能性」を認識していたが「政治的な理由により（中略）安全宣言を出す必要に迫られた」と推測します。

声明とは裏腹に、日本では放射能汚染されたマグロが次々と水揚げされ、人々は目に見えない放射能に怯えます。社会心理学者の関谷直哉氏によると、「広島・長崎の原爆被害は（中略）報道として広く伝えられないうちに終戦を迎えた。戦後はGHQによる検閲により、その実

態は伝えられなかった。一方、ビキニ事件の時には、新聞、ラジオ、（中略）TVでも、衝撃的に被ばくの実態が伝えられ、今日でいう風評被害が初めて問題になったとのことです。広島・長崎の原爆は情報が少な過ぎて風評被害が生じなかったというのも驚きです。その後、市民の放射能への不安は、原水爆禁止運動へと開花し、「翌1955（昭和33）年8月6日に広島で開かれた原水爆禁止の世界大会までに3200万人を越す署名が集ま」ります。これは当時の有権者数の半数に迫る数であり、ビキニ事件が当時の日本人に与えた衝撃の大きさがうかがわれます。

ビキニ事件は、放射線の影響や防護に関する研究が発展する契機にもなりました。1954当時のICRP（国際放射線防護委員会）勧告は、医療従事者の職業被ばくを対象としたもので、一般公衆の被ばくは想定されていませんでした。国連にUNSCEAR（原子放射線の影響に関する国連科学委員会）が設置されるのは事件の翌年です。更に、我が国の放射線防護に関する法令（放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律）の制定は事件から3年後の1957年です。放射線事故に対応する基準や法の整備が十分でない中、当時の科学者達の対応は極めて迅速でした。事件が明るみに出てからわずか2か月後の5月15日、水産学、放射能学、気象学、海洋学、医学等を専門とする22名の科学者を乗せた海洋調査船俊鵲丸が、51日間の航海に出発します。そして、水爆実験による海洋汚染の実態を世界で初めて明らかにしました。ストロース委員長による声明の500マイルはおろか「ビキニ環礁から1500キロメートル以上離れたサイパン島の近くでも（中略）高い汚染」が検出されました。同じく同年5月に、日本学術会議に「放射線影響調査特別委員会」が発足し、学際的な領域である放射線影響研究を牽引することになります。日本学術会議からの勧告により、筆者が所属する放射線医学総合研究所（現量子科学技術研究開発機構放射線医学研究所）が開設されるのは1957年です。

本書の副題に「ビキニからフクシマへの伝言」とあるとおり、福島第一原発事故に関心のある方に向けて書かれた書籍と思われます。しかし、本誌読者の皆さんへは、放射線影響研究の黎明期を語る読み物としてもお勧めできる1冊です。皆さんがご存じの先輩方も登場されるかもしれません。

（勝部 孝則 量子科学技術研究開発機構 放射線医学研究所）

-----  
 (ISBN978-4-8451-1503-7, 四六判, 168頁, 定価1,540円  
 (本体1,400円+税10%), 旬報社, <https://www.junposha.com/book/b317266.html>, 2017年)